

跋

今年になつてから西村長老と出会ひの機会が多かつたのも思えば地上の別れを急ぐためであつたのであるつか。一月には札幌に於ける中会修養会で、二月には道南の森と東瀬棚の伝道に同行し、三月には遠軽で北見地区の青年修養会に講師として又一しょであつた。そこから札幌に帰つて又中会で一しょになり、定山渓の温泉にも一しょに入つた。

受難週中四月一日の水曜日、私を電報で予め足留めしておいて突如函館に来られた。この度は公の使者であると断られて、北一条教会を代表されての私に対する牧師招聘のためであつた。即日帰られるといわれるのを無理にお願いして一泊していただくことにしたが、恰度その夜は受難週の祈祷会でもあつたので一場のお燐(すす)めをしていただいた。

こゝの考えて見ると今年は殆んど毎月西村長老にお目にかかっていたようである。ただ五月の御殿場に於ける修養会には東京までゆかれた長老がそこで臥床してしまわれたので、残念ながらお目にかかりなかつた。あの盛んな修養会に委員である西村長老の顔は是非とも欲しかつたし、恐らく当人としてもこれに出席出来なかつたことは千載の恨事であつたのである。でもこの時まで、まだ札幌ゆきを

躊躇していた私に、東京から夫人を使使として遣わされ、その決断を促がされたのであった。

私は御殿場からつづいて関西伝道旅行をすまし、六月八日に西村長老のお宅に伺つた。中会常置委員会が開かれることになつてゐたからである。この時氏は床に臥せつて眠つておられた。ややあって目醒められた時には汗ばんでおられたようだつた。それでも着替えをして委員会に出て来られた。西村長老は中会の会計を担当しておられたのである。

その翌日再び西村長老宅で北一教会の長老方と会見した。この時にも氏は病床から起きて来られたが顔面蒼白であつたにも拘らず、絶えず会談のイニシアチーヴをとつて居られた。

その後手紙の往復は何度があつたけれども、地上に於てお会いしたのはこれが最後であつた。

七月十一日の日曜日、礼拝を終つてまだ会堂にいた時、西村長老急逝の電報を受けとつた。ショックは大きかつた。とも角も午後の急行で立つことにした。

越えて十三・十四両日中會議長の近藤牧師と協力して葬儀に奉仕させていただいた。棺前祈祷会には四百人、告別式には八百人を超える会衆であった。皆西村長老との地上の別離を悲しむ人々であつた。

七月三十日に私は十七年間の函館に於ける牧会生活に終止符を打つて、札幌北一教会の牧師として赴任した。駅頭には病癒えられた小野村先生はじめ、教会の兄弟姉妹多数が出迎えて下さつたが、その中にあらるべき西村長老の顔のないことは人間的には言い難い寂しさであつた。併し考え方によつては余命の少い西村長老が、私のような者にあれほど熱心を以て迫られたのも何か深い意味があつたように思われて、私としてはまだ西村長老の後に続く者となる外に、生きる道がないように思われてならない。

それにしてもあの人間らしい人間、基督者らしい基督者であつた西村長老の面影とその逞しい伝道精神とを何とかして世に留めたいものと願つていたところ、幸にも氏が生前各所に於て語られた説教の草稿が十冊ばかりのノートになつて残つているとのことを歌子夫人から承つた。そこで早速それを拝借して読んで見ると、善つて承つた話が殆んどそのまま文章として残つてゐることを發見した。私はそれらの中から、特に自伝的要素のあるもの、伝道的要素の強いもの十数篇をピックアップしてこれを夫人に写しつけていただくことにした。西村長老の草稿は元より自らの覚え書きとして綴られたものであつて、敢えて世に問うなどは考へても見られなかつたものであるだけに、その細かい字のジグザグの草稿を淨書する」とほ並大抵の仕事ではなかつたと思つ。これを短時日になし遂げられたの

はひとえに夫人の御主人に対する尊敬と愛情の然らしめるところであると共に、實に夫君の伝道の志をいかにして世に生かしたいとの熱意によるものである。私はここに読者諸君と共に夫人のこの勞に対して深い感謝を捧げたいと思つ。

長く西村長老の牧師であつた小野村林蔵先生、晩年の知己であつた植村環先生からそれぞれ序文をいただけたことは故人の光榮であると共に編者などの心から感謝するところである。

願くばこの書が神の嘉し給う所となり、西村長老終生の願いであつたイエス・キリストの福音の証詞として、ひらく同胞の間に用いられんことを切に祈るものである。

一九五三年一月三日

(日本基督教会札幌北一条教会牧師)

森 好 春